

しつけに及ぼす影響—山手と下町による比較—

東京女子大・長津美代子 英立女子大・大越容子<sup>○</sup> お茶水女子大・鄭淑子

目的 本研究では、共働きの子に及ぼす影響を「しつけ」の視点から分析した。「しつけ」の内容としては、叱り方、賞の与え方、しつけの一貫性、しつけ不安、しつけ評価などをとりあげた。

方法 小学校6年生の子ともと親を対象に調査を行った。調査対象校は、杉並、目黒などの山手の小学校3校と、台東、葛飾などの下町の6校である。回収率は85%(948組)であったが、欠損家族や無知票を除く897組(山手400組、下町497組)を分析の対象とした。対象者の特性については、山手グループの父親は大半が大卒で、専門・管理・事務職が多いのに対し、下町グループでは、中卒が多く、職種では、技能・生産・単純および販売が大半を占めている。収入では、山手グループの方が高い。分析は、母親の就業形態(自営、常雇、パート、専業主婦)によって、「しつけ」がどのように異なるかを山手、下町に分けて行った。

結果 母親の分析では、就業形態や地域性にかかわらず、「子どものしつけについて夫婦がよく話しあっており」、「しつけ不安」もなく、しつけは「うまくいっている」と答える者が多かった。しかし、子どもの分析では、母親の就業形態や地域によって若干の差がみられた。しつけの一貫性のうち、しつけ全体間の不一致である「子に対する父母の対応の仕方の違い」は、山手グループでは、母親が常雇の場合に多く、下町グループでは専業主婦の場合に多い。また、金銭や物を与えるしつけ方法をとっている者は、下町の常雇の母親に多く、最も少ないのは、山手の専業主婦の母親の場合であった。